

分裂毎に短縮し、細胞老化のバイオマーカーと考えられている。その短縮は老化・癌・動脈硬化などに関与することが示され、加齢と深い関わりのあるアルツハイマー病 (AD) でも、テロメア短縮と病態との関係が報告されている。そこで、我々は AD をはじめとする老年期認知症患者において、末梢血白血球のテロメア長の測定を試み、その臨床的意義を検討した。

【対象と方法】 対象は AD 患者 74 例、レビー小体型認知症 (DLB) 13 例、軽度認知機能障害 (MCI) 6 名。35 人の正常高齢者コントロール (NEC) を対照とし、末梢血 350 μ l より automated magnetic bead system を用い genomic DNA を抽出した。Quantitative PCR 法は Cawthon らが報告した方法を一部改変し施行した。平均テロメア長はシングルコピーの遺伝子の増幅産物量に対する、テロメア配列から得られた増幅産物量の比 (T/S 比) で評価した。

【結果と結論】 平均テロメア長 T/S 比は MCI では NEC と差がなかったが、AD においては短縮傾向を認め ($P=0.1332$)、APOE4/E4 の表現型を有する症例では non-carrier と比較して有意にテロメア短縮を認めた ($P=0.0002$)。一方、DLB のテロメア長は症例により様々で、今後、加齢との関係、AD との異同等を明らかにする必要があると考えられた。以上より老年期認知症におけるテロメア動態は疾患特異的ではないものの、臨床病態を反映している可能性が示唆され、DLB を中心に症例の蓄積が必要と考えられた。

なお、本研究は文部科学省・私立大学学術研究高度化推進事業私立大学戦略的研究基盤形成支援事業「ナノ医工学を応用した再生医学研究拠点形成」(平成 22 年選定) の助成による。

P1-18.

海馬における海綿状血管腫と一過性全健忘との神経心理学的検討

(社会人大学院三年・内科学第三)

○井上 文

(内科学第三)

加藤 陽久、関 美雪、赫 寛雄

内海 裕也

【目的】 海馬に海綿状血管腫を呈した 1 症例と一過

性全健忘 (transient global amnesia: TGA) の 3 症例について神経心理学的特徴を検討した。

【対象と方法】 症例 1 (右海馬海綿状血管腫): 54 歳・男性、記憶障害を主訴に来院。右海馬に海綿状血管腫を有した。症例 2~4 (TGA): 62.5 ± 4.5 歳・男性 1 名、女性 2 名、いずれも可逆性の健忘を呈した。対象は全て右利きであった。全例に長谷川式簡易認知機能検査スケール (HDS-R) と Mini-Mental State Examination (MMSE)、および Wechsler Memory Scale-Revised (WMS-R) を行った。

【結果】 いずれも HDS-R と MMSE は正常範囲であった。WMS-R では、TGA 症例群では症例 2 で一般的記銘力の軽度の低下を認めたが、他の TGA 症例では正常範囲内であった。一方、症例 1 の WMS-R では注意・集中力を除く全ての項目で低下しており、遅延再生が顕著に低下していた。

【考察】 WMS-R は一般的記銘力、注意・集中力、遅延再生を評価できる。TGA は発作後の前向性健忘と短期の逆行性健忘を主徴とし、即時記憶や意味記憶、手続記憶は障害されず、海馬に器質的損傷がみられない。辺縁系の一過性の機能障害が示唆されているが、発作中のみであり、今回検討された TGA 症例でも WMS-R はほぼ正常範囲内であった。一方、海馬領域に海綿状血管腫を呈した症例では注意・集中力以外すべての項目で異常を呈し、遅延再生が高度に障害されていた。これは短期記憶に重要な役割を持つ海馬に占拠性病変があるためと考えられた。

【結語】 記憶障害を呈する 2 疾患の神経心理学的検査を比較した。この結果、海馬に器質的損傷を有する場合、広汎な記憶障害を指摘できた。病変部位やその広がりを推定するうえで、神経心理学的検査は重要な役割を担うと考える。